

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和元年八月三日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 杉山欣也(金沢大学人間社会研究域教授)

狂言 昆布売(ニジブツリ)

本来大名は太刀を家来に持たせるものです。その仕事を、本曲の大名は通りかかった若狭の小浜の昆布売りに押しつけます。太刀に手をかけての脅迫には昆布売りも承諾せざるを得ません。しかし、いったん太刀を手にする、両者の立場は逆転します。昆布売りの屈辱感、今や大名が味わい尽くします。昆布売りは「若狭の小浜の召しの昆布」を売り歩くのが仕事です。その売り声を大名に強制します。それはそれで心身が浮かれ出す楽しさもあります。どういう節を歌い分けて昆布を売るかが聞き所になります。

能 井筒(いづつ)

諸国一見の旅の僧(ワキ)が南都七堂を経て初瀬へ向かう途中、在原寺に立ち寄り、いにしへの業平と紀有常の娘の夫婦を弔います。そこへ思い出にひたり仏にすぎる様子の美しい女(前シテ)が現れ、井戸の水を汲み薄の生えた古塚に供えて回向します。僧がその理由を尋ねると、女は業平への弔いと言いつつ業平との関係は否定し、それでいて昔懐かしさは隠せず伊勢物語で知られる二人の恋を語ります。夫が通う河内への夜道を案じた「風吹けば」の歌、幼なじみの恋を育て結婚を誓い合った「筒井筒」の歌で知られる物語を回想した女は、その井筒の女、または紀有常の娘とは自分のことであると明かして、井筒の陰に隠れます(中入)。在原寺の夜が更けて、仮寝する僧の夢に紀有常娘(後シテ)が業平の形見の冠・直衣を身に着けて現れます。不在の業平を待ち続ける人待つ女は、業平になり変わり袖を翻して舞います。業平の詠歌を口ずさみ、業平の面影を慕って、男装した自分の姿を井筒の水面に映します。僧が夢に見る魄霊の姿は花が匂いを残すように消え、在原寺の鐘の音とともに僧の夢も破れます。

西村 聡(金沢大学人間社会研究域教授)

前シテ (里女)

髪をつけ、髪帯をしめ、増の面をかける。摺箔を着附に着、その上に色入唐織を着る。

後シテ (紀有常の娘)

髪をつけ、髪帯をし、増の面をかける。覆懸をつけた初冠を頂く。着附に摺箔を着、縫箔を腰巻にし、腰帯をしめる。その上に長絹を着る。(持物、扇)

(午後七時頃終了予定)